

新書部門

BEST 10

より専門的な作品が増加している新書。人間関係を説いた職場提案書のほか、注目の経済書も多数ランキン。

第1位

「不機嫌な職場」

高橋克徳、河合大介、永田稔、渡部幹
講談社新書

「職場や会社をご機嫌にしたい人にオススメする1冊。こういうご時勢ですので、職場のノルマ、低賃金など心理的なダメージがあるなかで、人のつながりや関係を良くするための方法を、押し付けがましくなく提案した本。文章も読みやすくて共感できました」

第2位

「ルポ 貧困大国アメリカ」

堤未果 岩波新書



「アメリカの貧困層の実態を暴いたルポルタージュ。正直言うと、背筋が寒くなる話でした。明らかに日本もここに向かっていく。そう思うと怖いですね」

第3位

「強欲資本主義 ウォール街の自爆」

神谷秀樹 文春新書



「ウォール街って高給取りのビジネスマンによる世界だと思っただけで私たちが理屈とかけ離れている。読みやすく経済の入門書としてもおすすめ」

第4位

「できそこないの男たち」

福岡伸一 光文社新書



「男性と女性という2つの性を、納得できるように比較した本。SRY遺伝子の発見をめぐる男と女の本当の関係に迫る1冊。いろいろと考えさせられます」

第5位

「悩む力」

姜尚中 集英社新書



「お悩み相談室ではないので、悩みに答えてくれるわけじゃないけど、問題は解決はしないけど、そもそも悩むことがとても大切だと教えてくれる」

第6位

「疑似科学入門」

池内了 岩波新書



「スピリチュアル、占いなどを信じる人が多いですが、科学のフリをした偽科学を論破していく本。この度にはまらないための方法を発見できる1冊」

第7位

「iPS細胞」

八代嘉美 平凡社新書



「iPS細胞という技術を使うことによって、病気や問題が将来的に解決できるのではないかと、という内容。世界的にホットな話題だし夢のある話」

第8位

「ジャーナリズム崩壊」

上杉隆 幻冬舎新書



「日本の記者クラブは世界で類を見ない特殊で不思議なシステム。権力と癒着したまま報道する問題点や、権力に従い事実を報道しない体質を明らかに」

第9位

「病気の相場」

富家孝ほか 青春出版



「病気にかかる値段の相場を教えてください。簡易なものですが、きつと役に立つと思います」

第10位

「地獄の日本兵」

飯田進 新潮新書



「戦後60年を越え、今後は戦争体験を語る人が減ってくる。私たちはこのような本を読み、非人道的な戦争というものをも再確認すべきだと思います」



選考者

八重洲ブックセンター八重洲本店
内田望さん

書店員歴は19年のベテラン。新書担当でフロア長を務める。本好きになったきっかけは、小学校のころに読んだ『怪人20面相』。今年の抱負は「学術書を読みたい」。

八重洲ブックセンター
八重洲本店
東京都中央区八重洲
2-5-1
☎03-3281-1811
🕒10～21時(日曜10～20時)
不定休

ますます細分化する新書
大ヒットはないが本格派揃い

2004年、養老孟司の「バカの壁」(新潮新書)からブームに火がついた新書。今日では、出版数がさらに増え、内容が細分化されている。この傾向について、「新書はJ-POP化しています」と、内田さんは語る。

「昔は国民的ヒット曲がありました。今のJ-POPにはない。同じように新書も大ヒット作があるわけではありませぬ。いろんな書籍があり、バラエティに富んだ作品が揃っています。2008年は爆発的なヒットはなかったものの、新書全体では拡散しつつ売れ行き好調。昨年は1年間で新書売り場棚を2割ほど増やしました(内田さん)」

今回、内田さんが1位に推してくれたのは、職場での対応や対策を丁寧に説いた「不機嫌な職場」。

「ビジネスのハウトゥー本、というところの感じがしますが、この本は『こうしろ』とは言わず、『こうしたらどうですか?』と丁寧に提案してくれる1冊。職場に限らず、どのコミュニケーションでも通用する人間関係の作り方を一緒に考えてくれますよ(内田さん)」

一昨年までは、ネットの株取引など、財テク本の出版ブームがあったが、不景気によりそのブームは去った。変わって、今、注目度が高いのは、金融破綻に関する経済書やルポルタージュだ。

「ルポ貧困大国アメリカ」や「強欲資本主義 ウォール街の自爆」など、アメリカの話が日本にとって他人事ではない。「強欲」は、ウォール街のビジネススマンたちが、錬金術を使う悪い魔法使いたの。これがファンタジーなら良かったのですが、まぎれもなく真実だから怖い(内田さん)」

多様化する新書に対する読者の目も肥えてきた。かつては「大判では出版できないからまずは新書で」という流れがあったが、今は専門知識のある著者が書く本格的な新書が求められる。

「新書に対する読者の目が厳しくなってきたので、安易に時事関係だけを追いかけている新書は売れなくなっていますね(内田さん)」

新書の魅力は、今、知りたいことや勉強したいことの入り口に立って安易な入門書であること。リーズナブルに知識を増やすことができる新書で、自分の知識と見解を広げたい。